観光まちづくり地における観光客と地域住民の属性の違いによる選好景観の評価傾向に関する研究
-仙北市角館中心市街地を対象として-

建築・都市アメニティグループ
B10C006　　伊藤　正太

観光まちづくり　　選好景観　　観光客　　地域住民

1. はじめに

近年、観光地づくりとまちづくりを一体化して地域活性化を図る観光まちづくりが注目され、実際に各地で取り組まれている。これは改めて地域資源を見直すことや地域空間を整備することで地域の魅力を高め、地域外の人に来訪してもらい地域経済を活性化させ地域を盛り上げようという活動である。観光まちづくりにおいて、“地域住民・地域空間・地域経済三者の調和※1 が重要である”(1)と指摘されており、この三者の調和についての実態を把握することは、将来の地域の維持発展を考える上での一つの指針になると考えられる。

2. 研修の枠組み

2-1. 着眼点

観光地の地域空間では、とりわけ景観に対する意識の高まりが窺え、観光客に関しては「景観雰囲気」が来訪満足度に大きな影響を有していることが明らかになっている。(2)したがって地域住民は、リピーターの確保や新規客の獲得に向けて景観や空間といったハード面を含めた空間整備の取り組みが不可欠となっている。

以上のことから、本研修では観光まちづくりを進めていく上で重要要素の一つである地域空間の景観に着眼することとする。

2-2. 対象

本研修では、以下を対象として取り扱う。(表 2-1)

2-3. 目的

本研修では、観光まちづくり実施地域において、景観に着眼し、地域住民と観光客それぞれが好む景観や景観構成要素を調査し、両者の選好景観の評価傾向を把握する。さらに、景観面における観光客と地域住民の評価傾向の違いを考察し、今後の観光まちづくりのあり方の知見を得ることを目的とする。

表 2-1 対象とする地域住民、地域空間及び地域経済

対象	地域住民	・・・　地域空間において在住・活動している人
	地域空間	・・・　秋田県仙北市角館中心市街地（図 2-1）
	地域経済	・・・　対象地域空間に来訪する観光客※2

○A エリア
角館駅前周辺
○B エリア
蔵が多く残る外町（商人町）
○C エリア
武家屋敷が建ち並ぶ内町
○D エリア
桜並木と土手
○E エリア
運動公園周辺

図 2-1 対象地域空間とエリア区分

3. 調査の方法と分析方法

3-1. 調査の方法

地域住民と観光客を評価主体としたキャプション評価法※3により両者の選好景観の評価傾向の実態調査を行なう。また分析精度を高めるために、評価者にはアンケート調査にも協力してもらい、観光客には来訪満足度、地域住民には地元誇り度に関する内容を問い、補足情報を把握する。キャプション評価法による調査の結果概要を(表 3-2)に示す。

＜キャプション評価法＞

手法の基本的な手順を以下に示す。

①評価者は、カメラを持って自由に散策する。　②撮影条件(表 3-1)に従い「良い／悪いと思う景観」があれば撮影する。③地図に撮影した地点のプロットと 、評価シート（図 3-1）に撮影した景観について「何の（以下【要素】)」「どんなところ（以下【特徴】)」「どう感じたか（以下【印象】)」よって「良い／悪い（以下【評価】)」の４点を自由記述で明記(キャプション)する。④【評価】で「良い」と評価した場合「この景観をいつかまた観に来たいか（以下【再来訪】)」を５段階評価で回答する。⑤参考資料として、「参考にした観光雑誌等の有無」について該当する場合に回答してもらう。

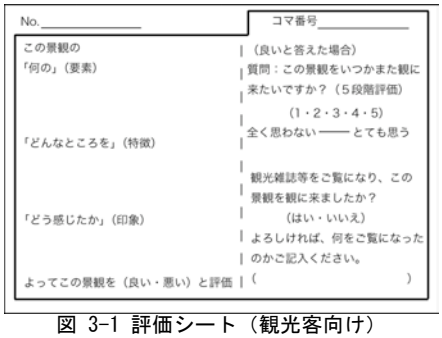

No.＿＿＿＿＿＿　コマ番号＿＿＿＿＿＿
この景観の
「何の」（要素）
「どんなところを」（特徴）
「どう感じたか」（印象）
よってこの景観を（良い・悪い）と評価
（良いと答えた場合）
質問：この景観をいつかまた観に来たいですか？（5段階評価）
（1・2・3・4・5）
全く思わない ―― とても思う
観光雑誌等をご覧になり、この景観を観に来ましたか？
（はい・いいえ）
よろしければ、何をご覧になったのかご記入ください。
（　　）

図 3-1 評価シート（観光客向け）

表 3-1 評価主体別の景観撮影条件

	撮影する景観（両方或いはいずれかでも可）
観光客	「角館で魅力的に感じた景観」 「角館で嫌だなと感じた景観」
地域住民	「角館で観光客に観てもらいたい景観」 「角館で観光客に見せるにはまずいかなと感じた景観」

表 3-2 景観調査の結果概要

対象	観光客	地域住民
調査日	2011.05.07/2011.05.29	2011.05.30/2011.05.31
方法	直接配布	直接配布/ポスト投函・郵送回収
依頼人数	35	76
サンプル数	4サンプル/1人当たり※4	
回収人数	25	18
有効サンプル数	64	62
回収率	45.70%	20.40%

A Study on the evaluation tendencies of preference for townscape by tourists and local residents in the Sightseeing Town Planning Area.
-Case of Kakunodate area in Senboku City-

Shota Ito

3-2. 分析方法

自由記述方式の回答文を整理するにあたり、はじめに回答してもらった【要素】【特徴】【印象】の中から、分析対象とする単語やフレーズ※5 の抽出を行った。そこから既往研究(3)を参考に抽出した単語やフレーズを成分毎に分類していった。一つの成分に複数の単語(フレーズ)がある場合は、それら全てを区別して抽出し分析対象とする。

4. 分析考察

4-1. 観光客による選好景観の評価傾向

観光客の選好景観の評価※6 傾向として、【要素】は単一種の要素をメインに捉えた景観・歴史的建造物（主に武家屋敷)・緑が挙げられた。その【特徴】として、その存在や佇まい・見え方・そのものから感じる雰囲気に注目しており、綺麗だな・落ち着くな・周囲と合っているといった【印象】を受けていると読み取れた。地図上では、C,D エリアに集中している。(図 4-1)キャプションは単語での表現が多く、簡潔に評価する傾向がみられた。

4-2. 地域住民による選好景観の評価傾向

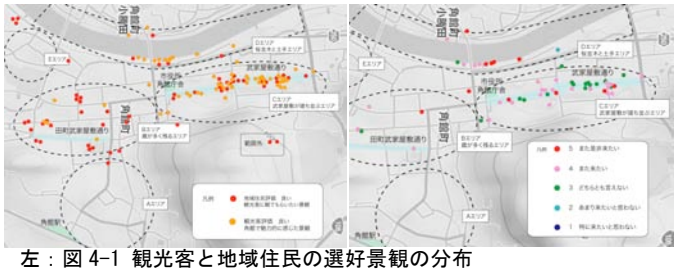
地域住民の選好景観の評価※6 傾向として、【要素】は「通りと建物」というような複数種の要素により構成される景観・神社公園といった空間・武家屋敷をはじめとする歴史的建造物が挙げられた。その【特徴】として、その外観や仕様・位置・季節感に注目しており、癒される・凄いという感情や風情があるといった【印象】を受けていると読み取れた。地図上では B,C エリアに集中している。(図 4-1)キャプションはフレーズやセンテンスでの表現が多く、詳細に評価する傾向がみられた。

4-3. 観光客と地域住民の評価傾向の違い

双方の評価傾向を比較すると(表 4-1)、【要素】で共通して高い評価を得た「景観」だが“単一要素をメインとした景観”“複数要素による構成される景観”と捉え方に違いがみられた。また観光客は、【要素】の見え方や周囲との調和といった概略的見え方に着目し即地性のない調和を評価しているのに比べ、地域住民は【要素】の建物の材質や色彩、季節による変化等詳細や全体バランスに着目し地域性を評価する傾向がみられた。選好景観の分布(図 4-1)でも差が見られ、特に B・C エリアに着目した。C エリアは伝建地区※7 に指定されている区域も含むエリアであり地域 住民の「観てほしい」と観光客の「魅力的に感じる」評価の 分布の一致が読み取れる。対して B エリアは、蔵が多く現存する商人町で観光客の評価は 6 箇所に留まっており、双方に乖離が生じていた。再来訪意向度の視点からみると 評価自体は高めであり（図 4-2)、B エリアにも観光客を惹き付けるものが点在しているのではないだろうかと想定される。

5. まとめ

本研修では、観光客と地域住民による選好景観の評価傾向を明らかにした。その結果、評価地点に関して双方に乖離が生じていることが判明し、うまく調和※1 がとれていないと推測され持続性に課題があると考えられる 。この乖離を如何に埋めていくかが観光まちづくりとして維持発展してゆく際には重要である。 角館においては地域住民が誇 りと感じているものを、さらに磨くことで価値を 高め魅力に変えていくことも一つの方法ではないだろうか。



左：図 4-1 観光客と地域住民の選好景観の分布
右：図 4-2 景観面における観光客の再来訪意向度 5 段階評価の分布

表 4-1 評価者属性別の選好する単語やフレーズの分類結果の比較

			観光客	地域住民	具体例（単語・フレーズ）
要素		共通	「景観」「建物（旧）」		武家屋敷
		相違	単一要素をメインとした景観 「緑（複数）」	複数要素により構成される景観 「道路」「宗教的空間」「空間」	桜並木 神社 庭園
評価判断に繋がる理由	特徴	共通	「フィーリング」「存在」「様子」「色彩」「新旧・年代」		雰囲気がいい 水が流れている
		相違	「形態」「見え方」	「季節」「位置」「対比」「見通し・眺め」	四方に並んでいる 冬になると綺麗になる
	印象	共通	「美観」「感情」「雰囲気」		綺麗 落ち着く
		相違	「調和」	「地域性」「歴史」	周囲と合っている 地元民の心を感じる
エリア		共通	C エリア：武家屋敷が建ち並ぶ内町		図 4-3　左上
		相違	D エリア： 桜並木と土手	B エリア：蔵が多く残る外町	D エリア：図 4-3　左下 B エリア：図 4-3　右

図 4-3 エリア別の評価者撮影写真(一例)

謝辞

研究を進めるにあたり、景観評価の評価者として角館まちづくり研究所、仙北市商工会角館本所の職員の皆様をはじめとする角館地域住民の方々、本学木匠塾サークルの方々には多大なご協力をいただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

【補注】

※1　持続可能な形で異なる要素が適切に関連づいていること
※2　今回は地域経済に大きな影響力を有する観光客を地域経済の対象として取り扱うこととする。
※3　古賀らによって提案された住民参加型の景観評価手法
※4　評価 1 箇所を 1 サンプルとする。また、評価の質を均一にするため評価者には 1 人 4 箇所の撮影・評価をお願いしている。
※5　フレーズとは、慣用句を指しセンテンスとは異なる。
※6　本研修の分析考察においては、調査により得られた「悪い」評価のサンプルが僅かであり分析するには不十分だと判断した為、分析対象から除外している。
※7　重要伝統的建造物群保存地区

【引用・参考文献】

(1)　西村幸夫ほか：観光まちづくり　まち自慢からはじまる地域マネジメント, 学芸出版社, pp22, 2009/02
(2)　観光地の魅力向上に向けた評価手法調査事業報告書, 観光庁, 2010/03
(3)　小島隆矢・古賀誉章ほか：多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析―都市景観の認知と評価の構造に関する研究その２― ，日本建築学会計画系論文集　第 560 号, 51-58, 2002/10

秋田県立大学　システム科学技術学部
建築環境システム学科　建築・都市アメニティグループ
Urban and Architectural Planning Lab. Dept.of Architecture and Environment Systems. Faculty of Systems science and technology, Akita Pref.Univ.